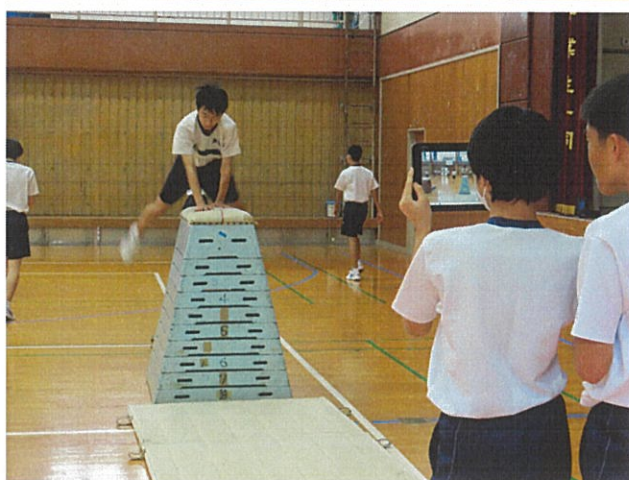


令和4年度 教育論文

教科・領域 全教科全領域

〈論文題〉

熊本の学びによる確かな学力と豊かな心の育成
～子どもたちが「学びの主体」となる授業改善と
学習習慣形成を目指して～



山都町立矢部中学校 研究同人

目次

はじめに

I	研究の概要	1
1	研究主題	1
2	研究主題設定の理由	1
3	研究主題の捉え方	3
II	研究の方法	3
1	研究の仮説	3
2	研究の視点	4
3	研究組織	4
4	研究の構想	5
III	研究の実際	6
1	授業づくり研究部会の取組（視点1について）	6
	（1）熊本の学びの授業スタイルの提案と共通実践	
	（2）検証改善サイクルプランに沿った省察及び課題克服の徹底	
2	学習環境（家庭）研究部会の取組（視点2について）	12
	（1）家庭学習をセルフプロデュースできる力を育む取組	
	（2）家庭でのタイムマネジメント力の育成	
3	学習環境（学校）研究部会の取組（視点3について）	14
	（1）誰一人取り残さない矢部スタイルの確立	
	（2）教育相談及び学習教育相談の実施	
	（3）掲示物の内容精選	
	（4）生徒同士の間人間関係を向上させる取組	
VI	研究の成果と課題	17
1	研究の成果	17
	（1）生徒の実態から	
	（2）研究の仮説から	
2	研究の課題と志向	20

参考・引用文献

おわりに

研究同人

はじめに

熊本県では令和2年度から「熊本の学び」を推進し、すべての子供たちが能動的に学び、確かな学力を身に付けることを目指しています。熊本の未来を創る子供たちを誰一人取り残すことなく、基礎学力を保障し、それぞれの夢と幸せを実現できるように、県全体が一体となって取り組んでいるのは、ご承知のとおりです。

本校は、上益城郡教育委員会連絡協議会から「上益城郡中学校区学力向上研究指定事業」の研究指定を受け、研究主題を「『熊本の学び』による確かな学力と豊かな心の育成」として研究を進めて2年が経過しました。研究の主となるキーワードは、「家庭教育力（プランニング・自学）」「組織で取り組む（RPDCA・単元振り返りワークシート）」「9年間で育てる（9年間の見通し）」です。昨年度の取組をとおして見えてきた課題を踏まえ、授業づくりと学習環境を軸として、副題を「子どもたちが『学びの主体』となる授業改善と学習習慣形成を目指して」としました。

これまでの研究の成果と課題を踏まえ、今年度も「熊本の学びによる確かな学力と豊かな心の育成～子どもたちが『学びの主体』となる授業改善と学習習慣形成を目指して～」を研究主題として、授業づくり研究会、学習環境（家庭）研究会、学習環境（学校）研究会の3部会を構成し、研究に取り組みました。また、それを支える取組として、保護者への啓発や協力体制の強化、小学校との円滑な接続のための共通理解や連携を行っていきました。ここに1年間の取組をまとめ、自ら総括することにより、今後の研究・実践に生かし、本校研究主題と教育目標の達成に迫りたいと思っています。

I 研究の概要

1 研究主題

熊本の学びによる確かな学力と豊かな心の育成

～子どもたちが「学びの主体」となる授業改善と学習習慣形成を目指して～

2 研究主題設定の理由

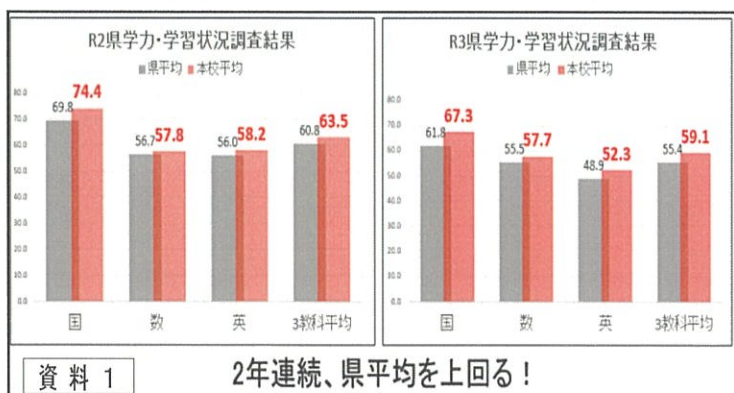
(1) 学校教育目標の具現化を図るために

①本校の教育目標から

本年度の学校教育目標には「自ら学び 自他を大切にして 共に歩み続ける 生徒の育成」を掲げている。この「自ら学び」とは、これからの予測できない未来に対応するためには、社会の変化に対して受け身になるのではなく、主体的に向き合って関わり合い、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を創り出していくことが重要であることを意味している。そうなるためには、子供たちが、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。そのことは、平成31年4月の熊本の学び総合構想会議での提言「熊本の未来の創り手となる子供たちに期待する学び」とその理念に基づいた「熊本の学び」を生徒に身につけさせることであるといえる。「熊本の学び」の四つの基本方針を踏まえ、本校研究主題を具現化する取組を行うことは、学校として育成を目指す資質・能力を育み、この学校教育目標への到達を可能にするものである。

②本校研究の流れから

本校では、平成29年度から「確かな学力」の育成を目指して研究を継続してきた。また、令和3年度からは上益城郡教育委員会連絡協議会指定による矢部中学校区「学力向上」研究指定事業を受け、「熊本の学びによる確かな学力と豊かな心の育成～子どもたちが『学びの主体』となる授業改善と学習習慣形成を目指して～」という研究主題で校区の小学校とともに研究に取り組んできた。9年間で育む力を明確にし、小中が連携しながら研究を進めることで学力向上を目指してきた。令和2・3年度の県学力・学習状況調査（以下、県学調）



では県平均を上回り（資料1），各教科の経年変化を見ても令和2年度の結果より令和3年度の結果の方が県平均との差が広がってきており，成果が上がっている。（資料2）。そこで，本年度は，昨年度までの学力向上の取組を継続させながら，「熊本の学び」の実現を目指した研究を進めることで，更なる学力向上を目指したいと考えた。

③生徒の実態から

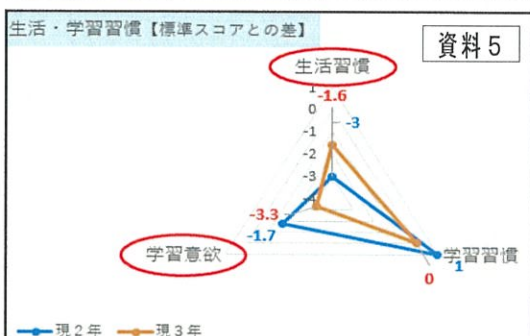
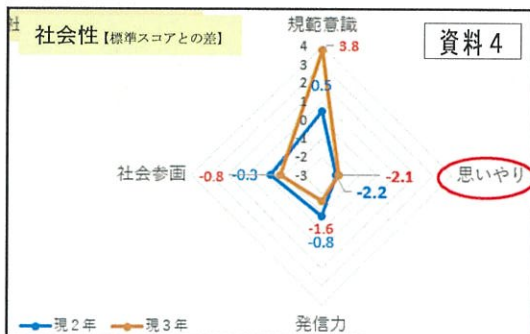
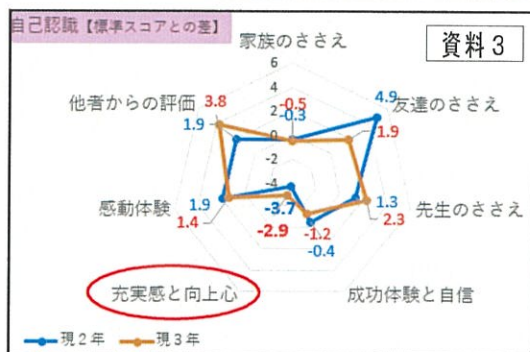
本校の生徒は，素直で明るく，真面目に学習に取り組む。しかし，令和3年度の県学調質問紙で標準スコアに満たなかったカテゴリーのうち，2学年ともに-1.0ポイントより下回ったものが「充実感と向上心（自己認識）」（資料3），「思いやり（社会性）」（資料4），生活習慣（生活・学習習慣）「学習意欲（生活・学習習慣）」（資料5）である。これらの領域を向上させるための取組が必要であると考えられる。

前述の3カテゴリーのうち，特に「自分の習熟度にあった課題に取り組む」の質問項目の肯定的回答率が65.5%となり，他の項目よりも数値が伸びなかった。学校教師質問紙（以下，教師質問紙）の同項目では肯定的回答率が100%であり，教師の意識と生徒の意識にずれが生じない効果的な取組の必要がある。また，わからないことがあってもそのままにして質問できない生徒や基礎学力の定着不足の生徒への対応を改善し，誰一人取り残さない学びの取組を構築する必要がある。更に，「将来，夢や希望があるか」「学校の学びは将来社会で役立つと思うか」「メディア利用時間」が2年連続で県平均を超えていない。令和3年度末の校内アンケート「わたしは，忘れ物などせず，『学びの姿勢』を守り，集中して学習に取り組むことができる。」が83.5%と令和2年度と比較して低かったことから，従来の取組を見直し，生徒が自分の未来を想像しながら目標をもって主体的に取り組めるような働きかけを行っていく必要がある。

令和2・3年度県学調結果

資料2	本校平均-県平均		差の広がり
	R2	R3	
国	+4.6	+5.6	+1.0
数	+1.1	+2.3	+1.1
英	+2.2	+3.4	+1.2
3教科平均	+2.6	+3.7	+1.1

県平均を上回り、差も広がってきている。



(2) 社会の要請から

学習指導要領第一章総則の第1の2では、各学校において、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、生徒に「生きる力」を育むことを目指すものとしている。そこで、どのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にし、主体的・対話的で深い学びを実現するためには、子供たちが「学びの主体」となる授業改善を行っていく必要があると考えた。

以上のことから、本研究主題「熊本の学びによる確かな学力と豊かな心の育成～子どもたちが『学びの主体』となる授業改善と学習習慣形成を目指して～」を設定した。

3 研究主題の捉え方

(1) 「熊本の学びによる確かな学力と豊かな心」とは

変化が激しく予測が困難なこれからの時代で、それぞれに描く幸せを実現するために一人一人が自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、その未来を切り拓いていくことが必要である。そのために、子供たちの未来につながる学びが、「学ぶ意味」を問いながら、「能動的に学び続ける力」を身に付ける熊本の学びによる確かな学力であり豊かな心であると捉える。

(2) 「子どもたちが『学びの主体』となる授業改善と学習習慣形成」とは

子供たちが「学びの主体」となる授業とは、授業を「子供たちの学びの側」から考え、子供たちが学びを通して「わくわく」したり、「やってみよう」とつぶやいたり、一人一人が学習した内容を十分に理解し、「分かった」「できた」という実感や達成感が生まれる授業のことである。授業で「主体的・対話的で深い学び」を実現させることにより、人間の生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えながら、教師が「教える」ことにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業や学習習慣形成のための手段の工夫・改善を重ねていくことである。

II 研究の方法

1 研究の仮説

仮説1 授業づくりにおいては、単元のデザイン化と学習過程を工夫し、生徒が主体的・対話的で深い学びを実現する場面を設定すれば、学び合うことへの充足感が高まり、「熊本の学び」が目指すものを身につけることができるであろう。

仮説2 家庭における学習環境において、家庭と連携を図りながら、生徒の学習習慣形成を促す取組を行えば、生徒が自らの学びをデザインできるようになり、主体的に学習に取り組む習慣を身につけることができるであろう。

仮説3 学校内の学習環境において、個に応じた課題設定や評価活動の徹底等を行えば、生徒の学習に対する達成感が高まり、自らの学びの姿を知り、次の学びに向かう姿勢を身につけることができるであろう。

2 研究の視点

熊本の学びによる「確かな学力」と「豊かな心」を身につけた生徒を育成するため、次の3の視点から研究を推進する。

視点1 授業力の向上

全職員の共通認識のもと、矢部中学校における『熊本の学び』の授業スタイル実現のための共通実践事項を設け実践する。子供たちが「学びの主体」となる「単元デザイン」をもとに、『熊本の学び』授業実践7つのチェックリストを意識した「導入」「展開」「まとめ」を行っていく。また、検証改善サイクルプランを活用して取組を振り返り、課題克服のための手立てを行う。

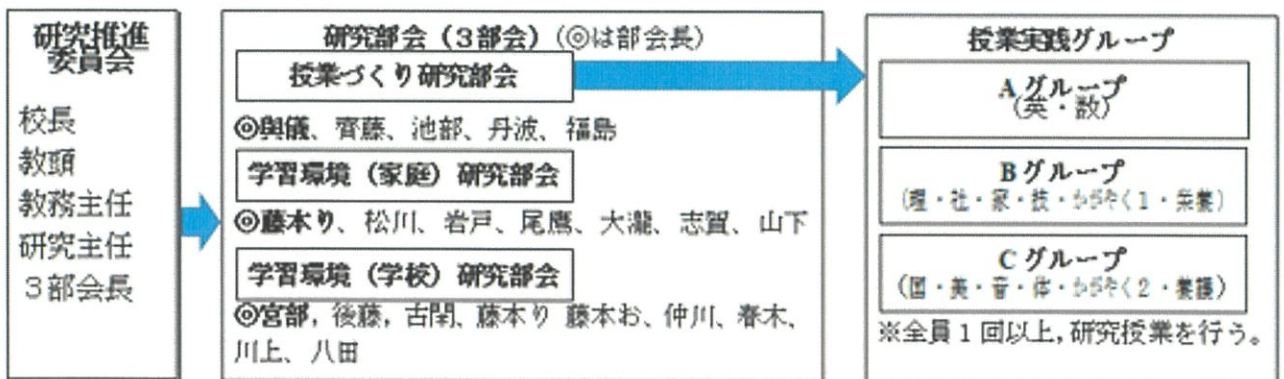
視点2 家庭における学習環境の向上

家庭の学習環境を向上させ、家庭学習の指導や工夫などを中心に、家庭と連携できる生活習慣向上と家庭学習をセルフプロデュースできる学習習慣形成を行う。

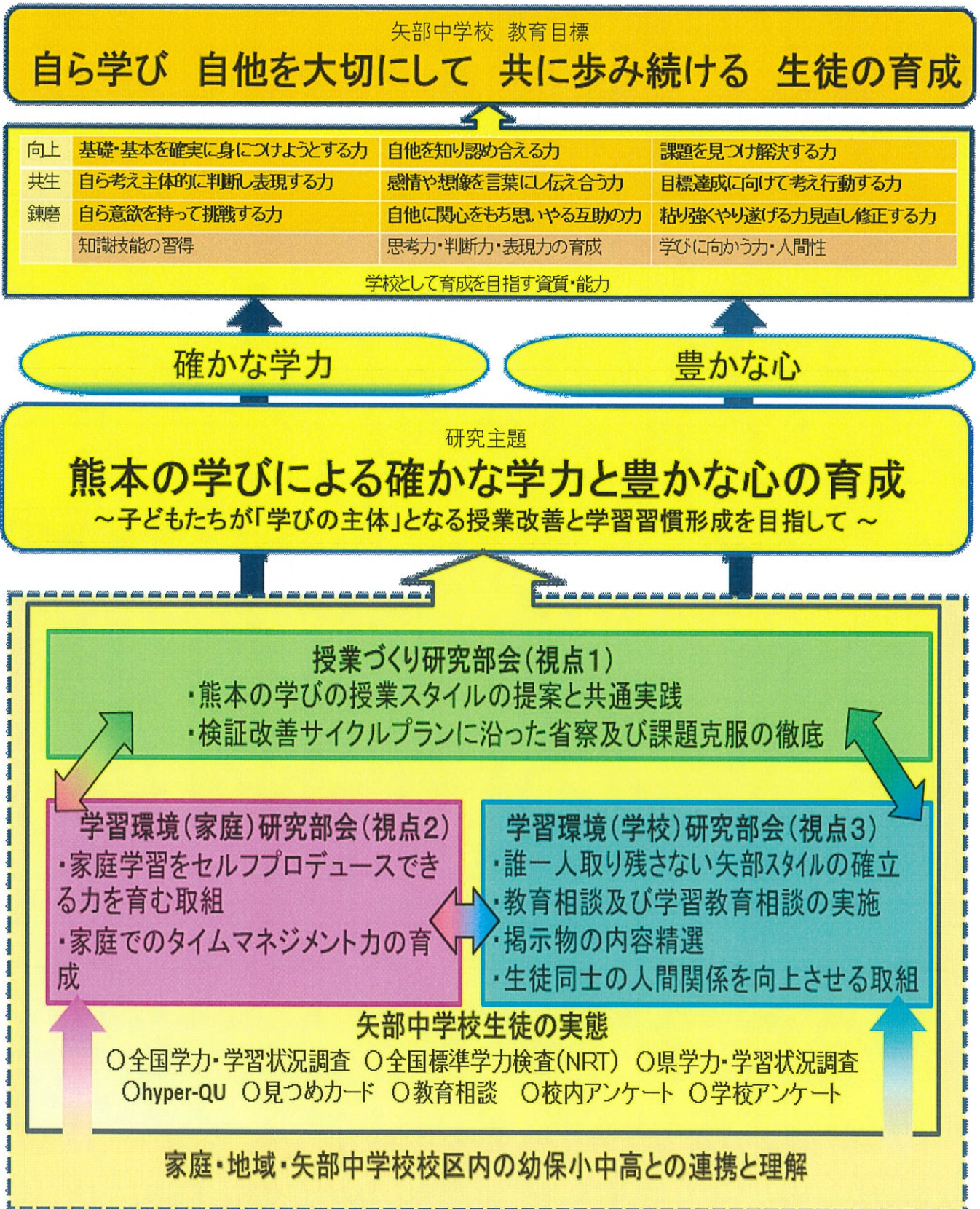
視点3 学校内での学習環境の向上

誰一人取り残さないための1日の学習過程スタイル「矢部スタイル」を確立する。そのための学校内の学習環境の改善や整備を行う。

3 研究組織



4 研究の構想



III 研究の実際

1 授業づくり研究部会の取組（視点1について）

(1) 熊本の学びの授業スタイルの提案と共通実践

①「熊本の学び」が実現する学習構想案づくり

「熊本の学び」を実現するための学習構想案の提案を行った。「単元終了時の生徒の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）」「単元を通した学習課題」「本単元で働かせる見方・考え方」を明記し、単元のまとまりを意識した授業づくりが行えるようにした（資料6）。また、「熊本の学び」授業実践の7つのチェックリストの視点をより具体的にするために「本時の見どころ」を設けた。「導入」「展開」「終末」のそれぞれの部分でどの視点を重点的に行うかを焦点化し、記述するようにし、授業者の意図がわかる学習構想案とした。

資料6

中学校第2学年 英語科学習構想案【小研用】
日時 令和4年10月6日（木）第3校時
場所 2年1組教室
指導者 教諭 興儀 聡子

1 単元構想

単元名	Unit4 Homestay in the United States		
単元の目標	(1)	have to, 助動詞 must, 動名詞などをを用いて、自分のスケジュールや学校のルールについて話すことができる。（知識・技能）	
	(2)	自分の生活や日本のことを知ってもらうために、しなければならないことや経験、習慣やマナーについて話すことができる。（思考力・判断力・表現力）	
	(3)	話す相手や場面に応じて、しなければならないことや経験、習慣やマナーについて話そうとする。（学びに向かう力・人間性）	
単元終了時の生徒の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）			
自分の生活や日本のことを知ってもらうために、しなければならないことや経験、習慣やマナーについて、聞き手に応じて伝えていく生徒。			
単元を通した学習課題		本単元で働かせる見方・考え方	
ALT に日本や外国中の生活をもっと知ってもらうために、自分たちの習慣やマナーについてわかりやすく伝えよう。		話す相手や場面に応じて、伝える内容や表現の工夫を工夫すること。	

本時の見どころ			
	視点	ポイント	
導入	視点(1)	簡単な対話を行うことで、英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする関心や意欲を高めさせる。	主・対・探
展開	視点(3)	分からない表現を共有して考えることで、活用できる表現に気づかせ、友達の影響を聞きながら自分の考えを再構築させる。	主・対・探
終末	視点(5)	「本時の学習と次時の学習のつながり」や「もっと伝えてみたいこと」などを視点に振り返らせる。	主・対・探

指導に当たっての留意点（矢部中学校の「熊本の学び」から）

「熊本の学び」による確かな「学びの成果」を達成させるために、授業者は「熊本の学び」の一子どもたちが「学びの主体」となるよう授業設計を工夫し、

【「熊本の学び」授業実践の7つのチェックリストより】

視点1	生徒の「問い(疑問や予想)」を引き出す
視点2	本時が「目指すめあて」を示し、生徒と共有し、
視点3	考えの練り合いの視点(まとめる、選ぶ、)をディベートしている。
視点4	「めあて」と整合したまとめを行っている。
視点5	「わかった」「もっとやってみよう」につながる「振り返り」を行っている。
視点6	効果的な場面でも目的に応じたICTの活用を行っている。
視点7	学習過程がわかるような整理された板書の工夫を行っている。

特に力を入れるところを焦点化して具体的に記述。

②単元デザイン（学習過程）を「見える化」する学習シートの作成

すべての教科で、教科の特性を生かしながら、単元の目標とゴール、1時間ごとのまとめや振り返りなどを記入するワークシートを作成した。

社会科では、単元の目標と学習内容のまとめを書いた学習シート（資料7）を作成し、授業の終わりには、学習したことを生徒自身の言葉でまとめ、記入するようにした。自分の言葉でまとめることによって、「わかった」「もっとやってみよう」などの実感や達成感につなげていった。そして、単元の終了時に、単元を通して分かるようになったこと、考えが広がったことの総括を行い、単元の学習前と後の自分の変化や成長を感じられるようにしている。

資料7

社会科 授業まとめ・単元振り返りシート

学習とは変化であり成長。

単元の目標 … 戦後の世界と日本の歩みとまをまとめることができる。

回	日付	学習内容	まとめ
1	6/1	占領下の日本 R. 1945年8月15日、その日、空襲の被害を受けて、日本は降参した。 各国民は降参後、米軍の占領下に置かれた。米軍は日本に民主主義を押しつけた。 1. 降参後、日本は米軍の占領下に置かれた。 2. 米軍は日本に民主主義を押しつけた。 3. 米軍は日本に民主主義を押しつけた。	分かったことを自分自身の言葉でまとめる。
2		民主化と日本国憲法	

英語科では、単元ごとに学習ノートを作成している。その表紙に単元のゴールや観点ごとにできるようになること（CAN-DOリスト）を明記し、単元の学習内容がわかるようにした（資料8）。単元のゴールを生徒と共有することで、生徒自身も見通しを持って授業に取り組むことができ、ゴールを達成するために活用できる英文を授業ごとにまとめていくなど、スモールステップでの学習にもつなげていった。単元の終わりには、単元を通して学んだことやできるようになったこと、次の単元で頑張りたいことなどを振り返りとしてまとめた。

Unit 4 Be Prepared and Work Together 資料8

単元のゴール
災害時に、日本だけでなく他国の人と互いに協力し合い、助け合うためにはどのようにしたらよいか、自分の意見や考えを書くことができる。

CAN-DOリスト

聞くこと	読むこと	話すこと(やり取り)	話すこと(発表)	書くこと
メグとリムの対話を聞いて、概要(おおよかな内容)聞き取ることができる。	防災について書かれた文章の概要を読み取りRoundに答えたり、T or F, Q&Aに答えたりすることができる。		災害に関する標識や内容について、説明することができる。	災害時にどのような行動をとったり助け合ったりすればよいか、自分の意見や考えを書くことができる。

【単元の振り返り】 この単元で「できるようになること」を明記して、単元の始めに知らせる。

③ 『熊本の学び』授業実践の7つのチェックリストの実施と評価

大研や小研の授業参観シート（資料9）にも「熊本の学び」授業実践7つのチェックリストを入れ、参観する視点を明確にした。次に、参観者がそれぞれの視点に対してどうだったのか4段階で評価をするようにした。また、生徒が主体的・対話的で深い学びを実現する授業を行うために、学習状況の上位・中間・下位層のグループごとに授業者が抽出生徒を決め、指示や発問に対してそれぞれの生徒の「発表」「会話(つぶやき)」「表情」「態度」「ワークシート等への記入内容」を中心に参観するようにした。

令和4年度 授業参観シート 資料9
令和4年11月15日(火)

授業者(3)年(藤本浩祐)先生 参観者()

1 『熊本の学び』授業実践のチェックリスト

チェック項目	観点	評価
① 生徒の「問い(疑問や予想)」を引き出す導入を工夫している。(熊本の学び4)	○	4
② 本時が目指すめあてを示し、生徒と共有している。		4
③ 考えの練り合いの視点(まとめる、選ぶ、ふくらませる)をもつて、対話する場面をコーディネートしている。(熊本の学び5)	◎	3
④ 「めあて」と整合したまとめを行っている。(熊本の学び6)		3
⑤ 「わかった」「もつとやってみよう」につながる振り返りを行っている。(熊本の学び6)	○	4
⑥ 効果的な場面で目的に応じたICTの活用を行っている。(熊本の学び8)		4
⑦ 学習過程がわかるような整理された板書の工夫を行っている。(熊本の学び8)		4

【授業参観シート】
 ① 問い・発問: 授業者の問いに対して、生徒が積極的に発言している。発問に対して、生徒が積極的に発言している。発問に対して、生徒が積極的に発言している。
 ② 生徒の反応: エル: エルのグループは、先生の話に熱心に話を聞いていた。エル: エルは、自分の考えを積極的に発言していた。エル: エルは、自分の考えを積極的に発言していた。エル: エルは、自分の考えを積極的に発言していた。

④ 全ての教師の指導力向上につながる授業研究の実施

全職員で研究を深めるために、1年間に2回の大研と、全員が1回の小研を実施

いいですね。 発問や追加発問を検討し直したほうが

すぐには、書き出さずには、発問が難しくなったのでは。

した。授業研究会の中では、抽出生徒の様子を出し合い、より効果的な指示や発問、ワークシートや教材、ICTの活用などについて話し合い、よりよい授業づくりにつながるようにした。また、それぞれの教科で活用している単元ワークシートや授業の「まとめ」「振り返り」の方法などの授業実践を出し合い情報交換も行った。

さらに、全職員の授業力を向上させるために、7月と10月には授業力向上週間に取り組んだ。授業力向上週間は、普段の授業を気軽に参観して学び合うことを目的に行っている。7月は、今年度矢部中に赴任した先生が、これまで矢部中にいた先生の授業を参観し、矢部中の授業のスタイルを知る機会にした。10月は教科や学年などに関係なく、自分が参観したい先生や教科の授業を参観するようにした。授業参観の期間を2～3週間設け、参観する時間を時間割の中に組み込み、必ず、相互参観できるようにした（資料10）。授業参観後は、参観シートに気づきを記入し、授業者に渡すようにしている。なお、授業参観シートは職員室にある校内研のホワイトボードに常に置いておき、授業力向上週間以外でも、いつでも気軽に参観できるようにしている。

大研では、授業研究会の前に事前研として、教師に対して模擬授業を行った（資料11）。授業のねらいを踏まえて、生徒が学びの主体となった授業となっているのか、授業参観の視点にある抽出生徒への発問が有効的なのかなど、生徒の目線で感じたことを出し合い、よりよい授業となるための意見交換の場とした。事前研を行うことで、全職員が大研の授業内容のイメージを持って参観することができ、一人一人が自分自身の授業の改善を目指しながら研究協議を進めることにつながった。

⑤授業の実際（3年理科「イオンと化学電池」教科書P198～大日本図書）

【本時の目標】電気泳動の実験結果をイオンの動きで解釈し、酸性とアルカリ性を示すものの正体を説明できる。

【章を貫く課題】「酸性の水溶液を中性にするためには、どうすればよいだろう。」

資料10

令和4年度 第2回授業力向上週間 決定のお知らせ

授業参観の日程が決定しましたのでお知らせします。

※都合が悪い場合は、授業者の先生と相談し、原則に調整をお願いします。

※授業参観シートは、授業参観当日の先生に提出してください。提出は、職員室のホワイトボードに置いてあります。

※参観シートは、授業参観当日の先生に提出してください。提出は、職員室のホワイトボードに置いてあります。

手回 不定期に見に行きます!

日付	時間	クラス	教科	参観される人	参観する人
10/24(水)	8	2-2	理科	藤本	菅原
10/24(水)	2	2-1	理科	藤本	菅原
10/24(水)	5	2-1	理科	藤本	菅原
10/31(水)	2	2-1	理科	藤本	菅原
11/7(水)	2	2-2	理科	藤本	菅原
11/7(水)	5	2-1	理科	藤本	菅原
11/14(水)	2	2-1	理科	藤本	菅原
11/14(水)	5	2-1	理科	藤本	菅原
11/21(水)	2	2-1	理科	藤本	菅原
11/21(水)	5	2-1	理科	藤本	菅原
11/28(水)	2	2-1	理科	藤本	菅原
11/28(水)	5	2-1	理科	藤本	菅原
12/5(水)	2	2-1	理科	藤本	菅原
12/5(水)	5	2-1	理科	藤本	菅原



文字が読みづらい。大きくした方がよい。
学習課題が難しいと感じた。

学習活動

導入

○生徒が学びの主体となるよう、単元デザインをもとに章を貫く課題を設定し、単元のゴールとその解決のための学習の見通しを確認した。



章を貫く課題の解決を目指して、今日は酸性とアルカリ性の正体を解き明かしていく学習を進めていく。まずは、映像で前回の実験を思い出そう。

前回の実験でしみが動いたので、電気が関係していると思う。

【めあて】実験結果を基に、酸性・アルカリ性を示すものの正体を説明できる。

【学習課題】酸性・アルカリ性を示すものは何だろう。

展開

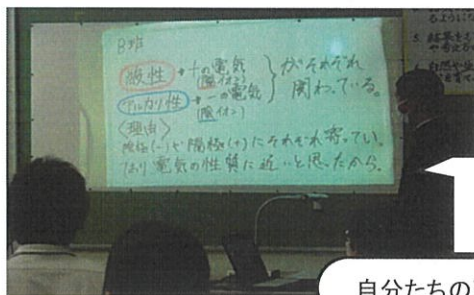
○抽出生徒（成績下位層）の理解を深める手立てとして、各班に学習リーダーを置き、教え合いや学び合いのできる環境を整えた。そして、「誰一人取り残さない学び」を実現するために、学習リーダーにファシリテーターとしての役割を与え、問いの内容や話し合い活動の進め方など工夫した。

実験結果は分かるけど、どうやって正体を考えるといいのか、その先が分からない。



電気に関係しているみたいだから、水溶液中のイオンに注目してみるといいと思う。それで、酸性は赤いしみが陰極の方に広がったから…。

○分からないことや疑問点も出しながら班協議を進め、班の意見がまとまったところで班内での発表練習を行った。そして、全体協議の中で、学習課題を解決するために考えの練り上げを進めた。



発表の練習をしたので、自信がついた。全体発表でも図を使って話してみよう。

酸性は+の電気を帯びたイオン、アルカリ性は、-の電気を帯びたイオンが関係している。

自分たちの班では出なかった意見だ。なるほど、そう考えるといいのか。

まとめ

○指導と評価の一体化のために、生徒自身が授業ごとに学びを振り返りシートに記入し、そこに授業者がコメントを加え、必要に応じて次時の授業で補足したり、課題設定に生かしている。また、振り返りシートの中に「家庭学習で取り組むこと」の欄を設け、授業の学びを家庭学習につなげている（資料12）。

3年生 単元4 3章 学習振り返りシート 3年 / 組 / 号 氏名 資料12

○ 学びの見直し

身につける知識や技能 酸性、アルカリ性、中性、それぞれの水溶液に共通する性質と確認方法	養う科学的に探究する力 実験結果をイオンのモデル図を使って分析し、酸性とアルカリ性の水溶液の共通性について考えをまとめる。	育む科学的に探究に向かう態度 学習課題について、生活の中の事象現象や学習したことをもとに予想を立てて実験を考えたり、イオンの考え方を試して、探究している。 学習状況を振り返り、よりよく分るために工夫しながら学習している。
--	--	--

単元の学習前と学習後の自分の考えを記入し、自分自身が学んだことや分かったことなどを確かめる。

○ 章を貫く課題

「酸性の水溶液を中性にするためには、どうすればよいだろうか。」
※ 既習や学習したことをもとに、科学的な用語、図やモデルなどを使って、自分の考え（具体的な方法）を書きます。

《学習前》
酸性の水溶液を中性にするにはどうすればよいだろうか？

《学習後》
酸性の水溶液を中性にするにはどうすればよいだろうか？
（水溶液を中性にするには、酸性の水溶液にアルカリ性を加える。）
（酸性の水溶液を中性にするには、酸性の水溶液にアルカリ性を加える。）

学習課題

「酸性、アルカリ性、中性の水溶液」	！(分かったこと) ?(新たな疑問) △(分らなかったこと)	★家庭学習で取り組むこと 17-7-7 問題集 p.22 ② 17-7-7 問題集 p.22 ③
-------------------	-----------------------------------	--

まとめと振り返りの後に、自分が復習する内容と方法を定める。

(2) 検証改善サイクルプランに沿った省察及び課題克服の徹底

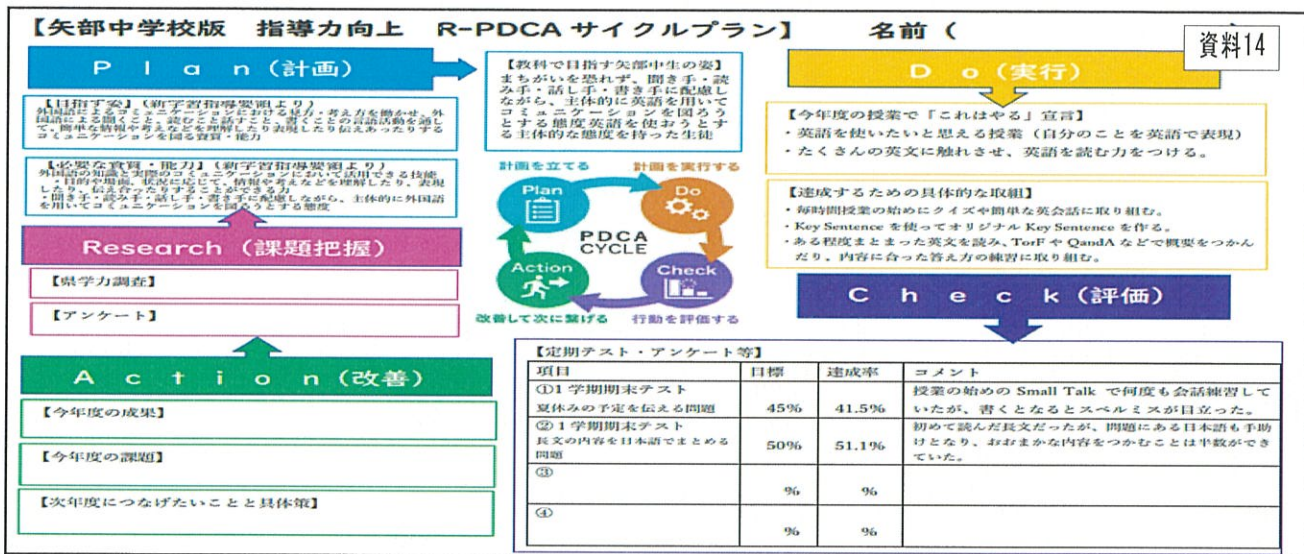
学力調査等を活用した学力向上の検証改善サイクルプラン 令和4年度 山都町立矢部中学校 資料13

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
PDCA	Plan	Do-Check		Action-Plan		Do	Check					Action	
過程	課題改善プラン作成	課題改善プランに基づく学習指導の実践・分析		課題改善に向けた取組プランの改善		学習指導の実践	県学力調査結果分析・プランの検証					課題改善に向けた取組	
全国学力学習状況調査 県学力調査		全国学力・学習状況調査実施		全国学力・学習状況調査結果公表			県学力調査実施		県学力調査実施			県学力調査	
校内の取組	●「県本県学力調査」結果(概要)の活用 ●県学力調査等の結果分析をもとにした本校の課題改善プラン作成	●全国学力・学習状況調査結果の活用 - 課題内容の整理 - 授業改善に向けた共通課題事項の抽出 ●県学力調査結果の活用 - 課題改善に向けた共通課題事項の抽出 ●研究テーマに沿った授業提案 ●小中連携実践(大研・小研) ●授業力向上取組		●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)		●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)	●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)	●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)	●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)	●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)	●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)	●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)	●全国学力学習状況調査結果の活用 - 全国での学習課題抽出 - 課題と対策の共通化 ●課題改善プランの修正 - 授業改善の提案 ●県学力調査に向けた対策提案 ●研究提案(小研)

学力調査等を活用した検証改善サイクル(資料13)に沿って、①～③の取組を進めた。

①矢部中学校版指導力向上R-PDCAサイクルプランの提案

昨年度から本校で取り組んでいた「矢部中学校版指導力向上R-PDCAサイクルプラン」(以下、R-PDCAプラン)を、本年度も全職員で作成した(資料14)。Plan(計画)として、年度当初に、教科ごとの目標や育成したい資質・能力を再確認し、教科として目指したい矢部中生の姿を設定した。それをもとに、Do(実行)として、目指す姿を実現させるためにできること、この1年間で実践したいことを教科や個人で考えた。そして、Check(評価)の部分で定期テストや校内アンケートで適宜検証し、目標と達成率の評価数値を確認することとした。



② 県の計画を活用した課題克服のための道筋づくり

全学調の結果を受け分析し、全職員で共通理解を図った。県の「課題改善に向けた重点取組」のシートをもとに、本校での重点取組を作成し、課題改善に取り組んだ。また、課題改善重点期間を設け、生徒を「学びの主体」とするための指導の充実に向けた具体的な取組（いつ・何を・どのように把握）をシートにまとめ課題改善を図った（資料15）。作成したシートは研究主任が点検とコメント記入をし、授業参観を行い、励ましのコメントやさらによりよい実践になるためのヒントを書き添って意欲の向上へとつなげた。

本校の重点取組 目標：本校の子供たち誰一人取り残すことなく、最大限に学びを保障する (活用シート)

課題改善重点期間 (11月8日 ~ 11月16日) 氏名 _____

●児童生徒を「学びの主体」とするための指導の充実

① 授業における主体的な学びを促す学習活動の充実
※単元全体を長通して、「自分で考える」「自分の考えを工夫して発表する」「自分の学びを振り返る」等の自ら取り組む学習場面を確実に設定する。

(P) (D) <具体的取組(いつ・何を・どのように把握)>
新しい表現(文法)を学習する時に、どのような表現が使われているか、プレゼンで先生と話し合う。
授業の最後の振り返りに、新しく学習した文法を使ったオリジナル Key Sentence を生徒に作成させる。
手紙を丁寧に書く練習、自分の考えを表現する練習

② 家庭学習における主体的な学びの充実
児童生徒が計画的に家庭学習に取り組むことができるよう、丁寧な指導を行う。

(P) (D) <具体的取組(いつ・何を・どのように把握)>
学習した文法のドリル/ノートを課題として出す → 次時で解答。
音読と単語練習、家でできるような課題を出す、家庭での学習環境を整える

③ 定着確認の徹底
※単元(授業)ごとに最低限習得すべき事項が身に付いているか確認し、分かる喜びや達成感が実感できるよう、身に付くまで粘り強く指導する。

(P) (D) <具体的取組(いつ・何を・どのように把握)>
授業中の小テスト、单元ごとの单元テストを実施する → 单元テストの前夜にプレテスト、演習テストを行う。
プレテスト、演習テストを行う

●各教科における課題の克服

① 課題である問題の確認とその克服
※(総括して)課題である問題の解答状況を把握し、本課が提供する「授業改善のポイント」、「類似問題」等を参考に、その克服を図る。

(A) <結果を基に実施把握・分析> 完了時期 8月31日
(P) <目標及び取組の立案> 完了時期 9月12日
(D) <プランの実行> 実行期間 11月8日~11月16日

【取組の検証】

【参考指標1】児童生徒質問紙
授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいませんか。
県・小学校：74.7% (全国差-2.6)
県・中学校：73.0% (全国差-6.2)
学校の現状 (82.7) 結果
県学調目標値 (82.7) → ()

【参考指標2】児童生徒質問紙
家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。
県・小学校：69.3% (全国差-1.8)
県・中学校：54.7% (全国差-3.8)
学校の現状 (88.5) 結果
県学調目標値 (88.5) → ()

【参考指標3】児童生徒質問紙
家で学校からの課題で分らないことがあったとき、どのようにしていますか。(そのままとしている割合)
県・小学校：15.5% (全国差+3.9)
県・中学校：14.6% (全国差+3.7)
学校の現状 (13.5) 結果
県学調目標値 (13.5) → ()

各教科の平均正答率
一前年度からの「伸び」

状況の向上を目指す

③ 検証のための校内アンケートの作成と実施

学期ごとに校内アンケートを作成、実施した。授業については、「熊本の学び」授業実践の7つのチェックリストに対応した項目で、生徒と教師にアンケートを実施し、生

徒と教師の意識にずれがないかなど、アンケート結果から7つのチェックリストを実践する意識を高めた。なお、今年度はR-PDCAプランをどの程度意識して取り組んでいるのかを振り返る項目を追加した。

2 学習環境（家庭）研究部会の取組（視点2について）

（1）家庭学習をセルフプロデュースできる力を育む取組

内容	番号	質問項目	よくしている	ときどきしている	あまりしていない	まったくしていない	
授業に関する事	1	生徒たちが互いに失敗や間違いを認めたり、考えの違いを大切にしたりするように指導している。（熊本の学び①）	4	3	2	1	
	2	単元終了時の生徒の姿をイメージして、単元デザインを行っている。（熊本の学び②）	4	3	2	1	
	3	生徒の「問い（疑問や予想）」を引き出す導入を工夫している。（熊本の学び④）＜矢部中授業づくりの基本形①＞	4	3	2	1	
	4	本時が目指すめあてを示し、生徒と共有している。（熊本の学び②）＜矢部中授業づくりの基本形②＞	4	3	2	1	
	5	考えの練り合いの視点（まとめる、選ぶ、ふくらませる）をもって、対話する場面をコーディネートしている。（熊本の学び⑤）＜矢部中授業づくりの基本形④＞	4	3	2	1	
	6	「めあて」と整合したまとめを行っている。（熊本の学び⑥）＜矢部中授業づくりの基本形⑤⑥＞	4	3	2	1	
	7	「わかった」「もっとやってみよう」につながる「振り返り」を行っている。（熊本の学び⑥）＜矢部中授業づくりの基本形⑦＞	4	3	2	1	
	8	生徒の実態を踏まえて、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導を行っている。（熊本の学び⑦）	4	3	2	1	
	ICT	9	効果的な場面で目的に応じたICTの活用を行っている。（熊本の学び※）	4	3	2	1
	板書	10	学習過程がわかるような整理された板書の工夫を行っている。（熊本の学び※）	4	3	2	1
	研究	11	R-PDCAサイクルのDo(実行)の項目を意識した授業実践が行えている。（授業づくり研究部会）	4	3	2	1

①プランニングタイムの確実な実施と、プランニングの意義の理解と意識向上

本校では、プランニングタイム（以下、PLT）という家庭学習を計画する時間を設けている。これは学校で学んだ教科の学習を家庭学習へとスムーズに移行させることを目的とするもので、帰りの会の後半部分で実施している。なお、本年度は、日課を整理して、PLTの時間を25分間とした。

教科	学習計画内容	時間
1	自 算	30分
2	書 7-7 P.22	10分
3	算 7-7 P.42~45	30分
4	算 7-7 P.60~61 71	20分
5	英 H-1 P.18~19	10分
6	英 T-11 G & A	10分

生徒たちはプランニングシート（資料17）にその日の家庭学習の予定を具体的に記入し、各学年の担任と副担任が確認する。また、各学年の家庭学習の目安の時間を設定（1年生80分、2年生100分、3年生120分）し、計画を立てる際にそれぞれの学習内容にかかる時間も考えさせ、その合計が学年の目安の時間を達成できるように指導している。そして、計画を立てた生徒は、残りの時間で自主学習に取り組む。毎日のPLTの中で、目的と進め方を確認することで、家庭学習の計画を立てることは生徒たちにとって当たり前のことになっており、スムーズに学習に取り組む様子がある。

②自主学習ノートの充実

毎日の自主学習ノート（以下、自学ノート）の取組や内容の充実を図るために、PLTで自学ノートの計画も合わせて行い、その日の復習や、翌日の授業の予習など生徒が自分に必要な学習に取り組むようにした。また、学習委員会主催の生徒集会において、異学年交流会の中で自学ノートの取り組み方について意見の交流をした（資料18）。交流後、1,2年生から、「3年生の

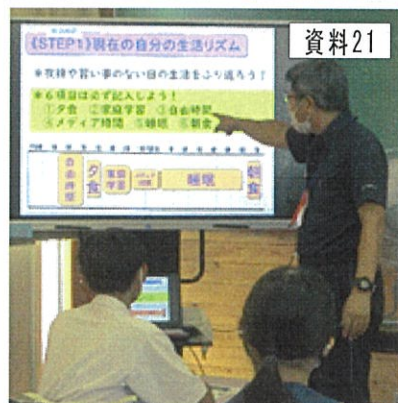


自学ノートは学習量が多くて驚いた。」「自分も、目標を決めて学習をするようにしたい。」などの感想が出ていた。加えて、各学年で工夫や参考にしてほしい自学ノートの掲示を行ったり（資料19）、授業参観や学級通信で自学ノートの取組について紹介したりして、家庭と連携して取り組めるようにした（資料20）。さらに、校区内の小学校と連携して、中学生の自学ノート（コピー）を出身小学校に掲示・紹介し、小学生が参考にする取組も実施した。



(2) 家庭でのタイムマネジメント力の育成

家庭での過ごし方も含めて学習習慣づくりを進めるために、「メディアチャレンジウィーク」の取組を進めた。これは、矢部中校区4校の共通実践として、生活習慣を整え、睡眠時間や家庭学習の時間を確保することをねらいとしている。昨年度の反省をもとに作成された指導者用の説明資料を使い、事前指導（資料21）と生活習慣改善の授業を各学級で実施した。



定期的な取組を実施する中で、生徒達は、自分の1日の生活を振り返り、メディアの時間を減らす生活リズムを考えるように変容していた。また、家庭と協力をしながら取組を進めることができた（資料22）。

10/25 (火)	0 ① 2 3	○ △ ×	弟とカーソル	資料22
10/26 (水)	0 ① 2 3	○ △ ×	たくさん手伝いかけた	
10/27 (木)	0 ① 2 3	○ △ ×	いつもより早く寝ました。	

<p><メディアチャレンジをした感想></p> <p>楽しかったけど、つづけていきたいです。</p>	<p><おうちの人から></p> <p>この学年中、おうちで読書ができた。</p>
--	---

タイムマネジメント力が向上すると、家庭での読書量が増えた。また、学校でも、毎週月曜日の朝自習で10分間の朝読書、給食準備中の読書など、様々な時間を使って読書する機会を設定し、読書習慣づくりの推進を図った。加えて、学習委員会による毎月の読書量チェックと読書量の掲示、放送による各学級の達成率の紹介、「おすすめの本の紹介」活動や多読賞の表彰、新聞コーナーの設置、毎週金曜日の朝自習の視写など、多様な取組を継続して実施した。



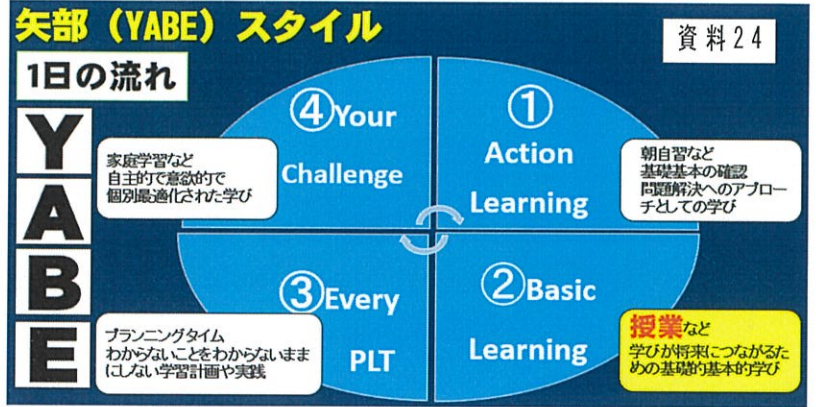
その結果、全校生徒の合計読書冊数は、半年間で4,500冊を超えている。（資料23）

3 学習環境（学校）研究部会の取組（視点3について）

(1) 誰一人取り残さない矢部スタイルの確立

学校で1日の学習が完遂する学習の流れを矢部スタイル（資料24）とし、全職員で共通理解をしながら校内の学習環境を整え、改善する取組を進めた。

以下、①～④の項目で、具体的な取組の内容を示す。



①問題解決へのアプローチとしての学びの取組

基礎的基本的な学習内容の定着を図るために、朝自習で計画的にミニテストを実施した。内容は、各学年の実態に応じて、1週間の中で、1,2年生は3教科、3年生は5教科を取り組むこととした。そして、取組のサイクル（資料25）をつくり、家庭学習が問題解決へのアプローチとなるようにした。取組を進めると、生徒たちのミニテストに対する意識が向上し、登校後にテストに向けて教え合いをする姿が見られるようになっていた。

資料25 取組のサイクル		朝自習計画					
前日の帰りの会 (プランニングタイム)	・ 朝自習やり直し、再テスト ・ 翌日のミニテスト内容の提示。 ・ 各教科担当者に、学習に関する質問をする。						
家庭学習	・ 翌日のミニテストに向けて、練習問題を自学ノートに解く	1年	読書	数学	英語	国語	読書
朝自習	・ ミニテスト	2年	読書	英語	国語	数学	視写
翌日の帰りの会 (プランニングタイム)	・ 朝自習やり直し、再テスト ・ 翌々日のミニテスト内容の提示	3年	国語	社会	数学	理科	英語

また、定期テスト2週間前から「学力アップ週間」（資料26）を設定し、基礎的基本的な

「学力アップ週間」の掲示物		
【10/24(月)～10/28(金)】		
25日(火)～28日(金)の朝自習で英語・数学のテストがあります。テストの内容は以下の通りです。		
日時	教科	内容・範囲
25日(火)	英語	語彙トレーニング p.1319～p.1420
26日(水)	数学	数学基本カード 47
27日(木)	英語	語彙トレーニング p.1421～p.1522
28日(金)	数学	数学基本カード 51

学習内容の定着を図る小テスト（数学・英語）の取組を集中して実施した。なお、「全学調」「県学調」の課題克服プリント・アシストシートを

6 1次方程式 $1.5x - 2.4 = 0.8x - 1$ を、次のように解きました。

$$\begin{array}{l} 1.5x - 2.4 = 0.8x - 1 \quad \cdots \textcircled{1} \\ 15x - 24 = 8x - 10 \quad \cdots \textcircled{2} \\ 15x - 8x = -10 + 24 \\ 7x = 14 \\ x = 2 \end{array}$$

上の①の式から②の式へ変形してよい理由として正しいものを、次の1～4から1つ選ばない。

- ①の式の両辺に10をたしても等式は成り立つから、②の式へ変形してよい。
- ①の式の両辺から10をひいても等式は成り立つから、②の式へ変形してよい。
- ①の式の両辺に10をかけても等式は成り立つから、②の式へ変形してよい。
- ①の式の両辺を10でわっても等式は成り立つから、②の式へ変形してよい。

令和4年度 1年 2学期期末テスト 数学

(3) 方程式を次のようにして解きました。(1)、(2)のように式を変形するとき、等式の性質のうちどれを使っていますか。下の□の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

$$\begin{array}{l} 4x - 6 = 14 \quad \left. \begin{array}{l} \square \\ \square \end{array} \right\} \langle 1 \rangle \\ 4x = 14 + 6 \\ 4x = 20 \\ x = 5 \quad \left. \begin{array}{l} \square \\ \square \end{array} \right\} \langle 2 \rangle \end{array}$$

(語群)

- ① $A = B$ ならば、 $A + C = B + C$
- ② $A = B$ ならば、 $A - C = B - C$
- ③ $A = B$ ならば、 $AC = BC$
- ④ $A = B$ ならば、 $\frac{A}{C} = \frac{B}{C}$ ($A + C = B + C$)

活用し、小テストの問題を定期テストにも出題することとした（資料27）。定期テストを連携させることによって、生徒たちは目標をもって家庭学習を進めていた。

②学びが将来につながるための基礎基本の学びに対する取組

「学びの姿勢5か条（山都町学習のルール）」（資料28）を設定し、学習の土台づくりと安心して学習することのできる環境づくりに取り組んだ。そして、生徒集会で全校生徒に周知し、各教科の授業で指導することにより徹底を図った。また、定期テストや県学力テスト等の2週間前には、生徒の自己評価（数値）による振り返りを実施し、その結果を校内放送で伝えるようにした。加えて、重点的に取り組む項目を決め、クラスマッチ形式で取り組むことで、生徒の意識の向上を促した（資料29）。さらに、すべての教科の授業で、ペアや班で学習したり、意見や考えを発表したりする場面を増やすことで、多くの生徒が安心した様子で、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。

矢部中生「学びの姿勢 5か条」。

- 1 学習用具の準備をし、1分前に着席します。
- 2 授業のはじめと終わりに、
3秒礼と大きな声であいさつをします。
- 3 先生や友だちに体を向けて、
集中して話や発表を聞きます。
- 4 積極的に発表や対話をします。
- 5 家庭学習を毎日します。

資料28

※家庭学習のめやすは、
1年生 80分 2年生 100分 3年生 120分。

【学びの姿勢5か条クラスマッチ】 1年Z組

◆採点基準

- 全員できている5点
- ほとんどできている4点（1～3人）
- どちらかというときでいる3点（4～7人△）
- どちらかというときでない2点（8～10人△）
- できていない1点（半数△）

★先生方から、よかった点、よくするポイントを伝えてく

		24（月）	25（火）	26（水）
自学ノート	全員提出	(4)点	(4)点	(4)点
1	1分前	(4)点	(4)点	(4)点
	3秒礼	(5)点	(5)点	(5)点
	あいさつ	(5)点	(5)点	(5)点
2	1分前	(4)点	(4)点	(4)点
	3秒礼	(5)点	(5)点	(5)点
	あいさつ	(5)点	(5)点	(5)点
3	1分前	(4)点	(4)点	(4)点
	3秒礼	(5)点	(5)点	(5)点
	あいさつ	(5)点	(5)点	(5)点

資料29

③分からないことを分からないままにしない学習計画や実践

令和3年度の校内研究の成果と課題の分析から、分からない学習内容があっても質問できない生徒が多くいる実態があった。そこで、PLTで、教科担当者がローテーションで各学年の教室を回り、生徒の質問に答えたり、補助指導をしたりすることにした。さらに、PLTでも学習リーダーを選び、生徒間の教え合いもできるようにした（資料30）。すると、自然と手を挙げて質問する生徒が増え、学習する雰囲気が高まっていた。各教科の授業でも学習リーダーの取組（資料31）を行い、すべての生徒が授業のめあてを達成できるようにすることを目指した。



教科担当だけでなく、学習リーダーからも教えてもらえる！

すると、自然と手を挙げて質問する生徒が増え、学習する雰囲気が高まっていた。各教科の授業でも学習リーダーの取組（資料31）を行い、すべての生徒が授業のめあてを達成できるようにすることを目指した。

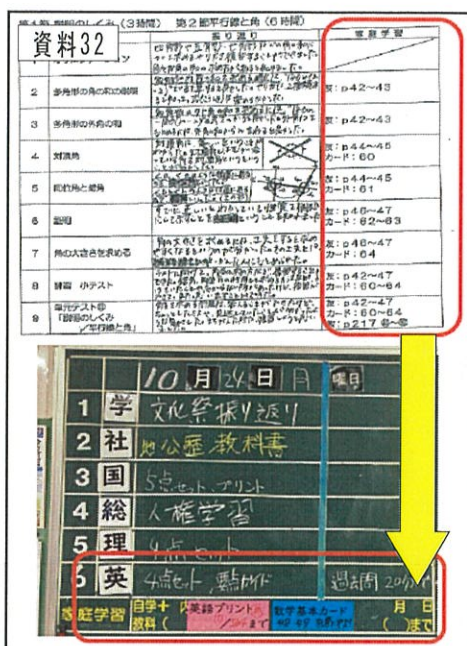
学習リーダーの役割	班活動の進め方
<ul style="list-style-type: none"> ・ 班の話し合いの場面で司会を務める。 ・ 班活動の中で、班員の課題への取組状況を確認し、意見の伝え合いや教え合いができるように調整する。 ・ 実習や実験、発表活動の役割分担をする。 <p>※ 学習リーダーは、教科ごとに、学習状況を考慮しながら、個々の生徒、生徒の希望や教師による指名で選出。また、学習リーダーを核として、学習班を編制。</p>	<p>（話し合い）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 司会の進行で、全員が意見や考えを話す（分からないことも含む）。 ・ 疑問点や分からないことに対して、意見交換と教え合いをする。 ・ 意見や考えの練り上げ（選ぶ、合わせる、新たな考えを生み出すなど）をする。 <p>（学習課題の協働解決）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 役割分担をして、活動を進める。 ・ 疑問点や分からないことに対して、意見交換と教え合いをする。

資料31

④自主的・意欲的で個別最適化された学びの取組

各教科の授業の中で、本時の学習内容の復習方法と練習問題の範囲を具体的に伝え、

家庭学習の計画づくりがスムーズにできるように工夫した（資料32）。また、全教科で計画的に宿題を出すように調整した。すると、ほとんどの生徒が、教科書やワーク、学習プリントを見ながら家庭学習の計画を記入するようになった。また、復習が必要な教科（内容）を考えながら、家庭学習の計画を立てる様子があった。各教科の宿題が同じ日に重なることもなくなった。



(2) 教育相談及び学習教育相談の実施

生徒一人一人の心身の状態を把握して適宜教育相談を実施するために、毎月「見つめカード」(生徒アンケート)の取組を実施している。また、生徒一人一人の学びを保障するために、定期的に学習教育相談を行った（資料33）。学習教育相談では、生徒自身が抱えている学習への課題やそれに伴う不安を教師と十分な時間をかけて話をすることで、学習についての今後の展望を見出す有意義な時間となっている。



(3) 掲示物の内容精選

校内の掲示場所を整備し、生徒自身の学習のあしあとが残るような掲示や生徒の作品等を積極的に掲示するようにした（資料34）。すると、多くの生徒が足を止め、掲示物を見て笑顔になる様子が見られた。



(4) 生徒同士の人間関係を向上させる取組

体育大会や合唱コンクール等の行事のあとには、先輩から後輩へのメッセージや後輩から先輩へのメッセージを交換する取組を実施した（資料35）。各学級でメッセージカード作成をし、できあがった掲示物を他学年に届けるようにした。そして、各教室に掲示すると、どの学級でも熱心にメッセージを読む姿があり、有意義な取組となっている。



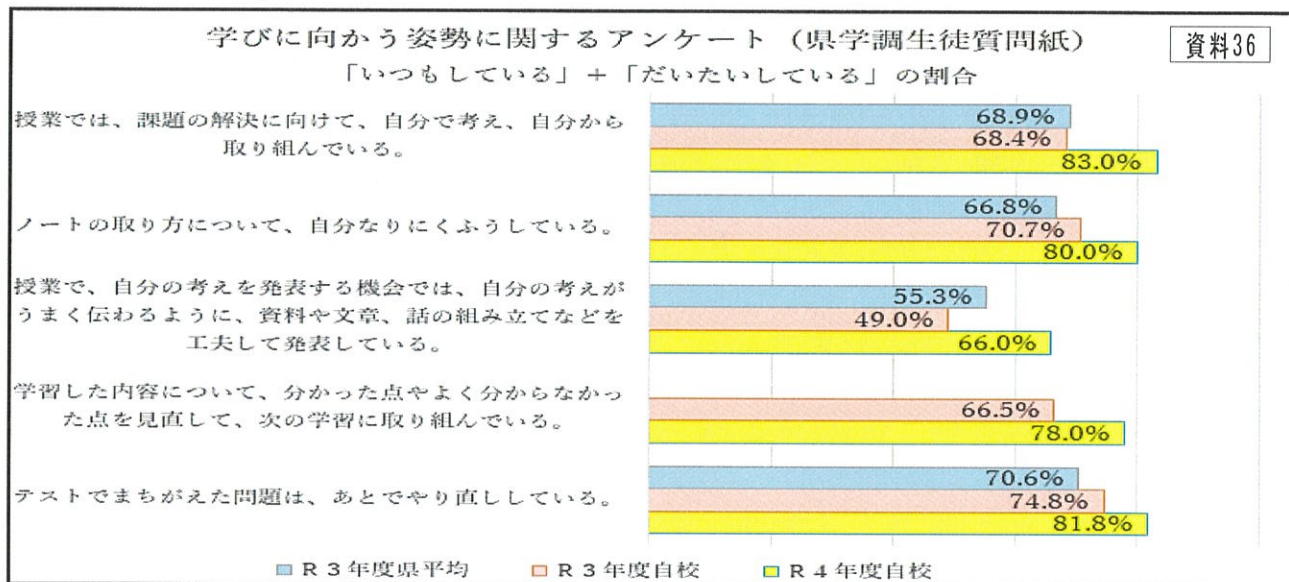
IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 生徒の実態から

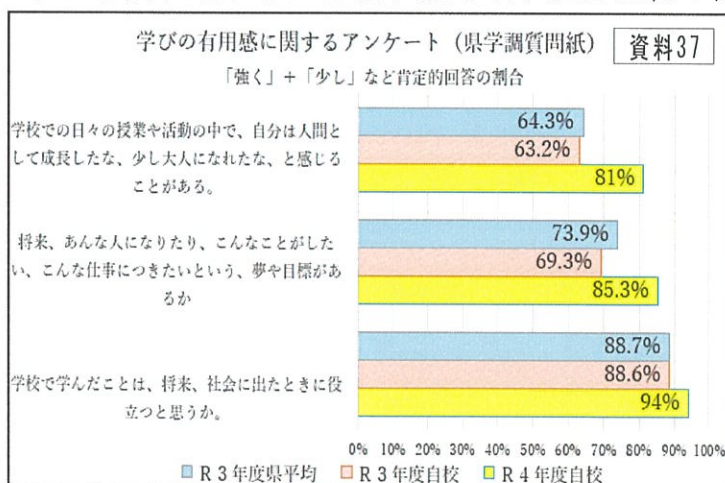
研究主題の実現に向けて「熊本の学び」を推進してきた。その成果として、「確かな学力」と「豊かな心」が育成できたかを検証する。なお、研究成果の検証には、令和3年度の県学調生徒質問紙及び令和4年度の県学調生徒質問紙（R4.12月実施後、校内独自集計）、県学調質問紙に倣った令和4年度の校内アンケートを成果指標として活用する。

① 「確かな学力」について

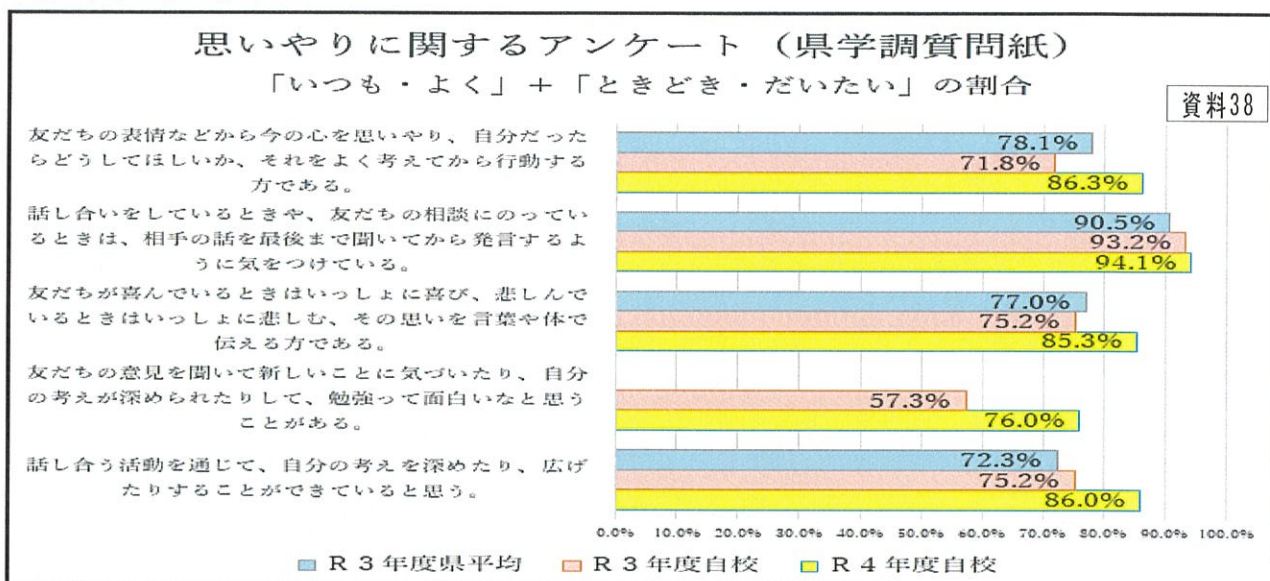


資料36より、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいるか」について肯定的回答率が前年度より15ポイント増加し、主体的に学ぶ意識の高まりがみられた。また、ノートを取り方を自分なりに工夫したり、発表の仕方を工夫するなど、能動的に学習に取り組んでいる生徒も増加した。そして、学習内容を見直したり、間違えた問題をやり直したりするなど、自らの学びを振り返りながら粘り強く取り組む生徒の割合も増加している。さらに、「将来、夢や希望があるか」「学校の学びは将来役に立つと思うか」の問いにも、肯定的回答率の伸びがみられた（資料37）。

このように、本年度の取組の成果として、学校全体として、「能動的に学び続ける力」に向上がみられた。



②「豊かな心」について



資料38より、「友だちのことをよく考えて行動する」「相手の話を最後まで聞いてから発言する」「一緒に喜んだり悲しんだりする」など、思いやりに関する項目の肯定的回答率が増加し、改善がみられた。特に、「友だちの意見を聞いて勉強って面白いなと思う」「話し合い活動で自分の考えを広げたり深めたりしている」の項目は、それぞれ10ポイント以上増加し、友だちとの学び合いを有意義だと感じている生徒が増加しているといえる。様々な機会に友だちと思いを交流し、授業中の学び合いを積極的に取り入れることで、「思いやりの心」や関わり方のスキルの育成が促進したものと考える。

(2) 研究の仮説から

①仮説1について

ア 熊本の学びの授業スタイルの提案と共通実践

「熊本の学び」の授業スタイルを軸にした授業改善の結果、校内アンケートで教師の授業づくりに対する意識が向上した。特に「単元終了時の生徒の姿をイメージして、単元デザインを行っている。(熊本の学び②)」の項目で、肯定的回答率が12月に100%となり、全職員で単元デザインを意識した授業づくりに取り組めたことが分かる。また、小研や授業力向上週間を通して、教師間で単元デザインについての情報交換や指導方法の交流が多くなされ、授業改善を行うことができた。

イ 検証改善サイクルプランに沿った省察及び課題克服の徹底

校内アンケート「R-PDCAサイクルのDo（実行）の項目を意識した授業実践が行えている」の項目で、肯定的回答率が12月に100%となり、意識の向上があった。

これは、R-PDCAプランを適宜確認することで意識の高まりがあったためと考える。

また、県学調の「学校教師質問紙調査」では、「昨年度の県学調の結果が指導方法の工夫改善等に活用されているか」の問いに対し、昨年度は「そう思う」と回答した教師が33.3%であったが、本年度は「そう思う」が86.7%、「どちらかといえばそう思う」13.3%と、授業を行っているすべての教師が好意的な回答をしており、R-PDCAプランを意識した取組が浸透した。

このように、県学調等を活用した学力向上の検証改善サイクルや本校の重点取組を個別に作成したことで、教師一人一人の課題意識が高まり、授業改善を進めることができたと考える。

②仮説2について

ア 家庭学習をセルフプロデュースできる力を育む取組

県学調質問紙の「家で勉強するときは、自分で計画を立てていますか」の項目では、肯定回答率が96.0%となり、昨年度を27.0ポイントも上回る結果(R3年69.0%)となった。また、「平日どれくらいの時間勉強しますか」の項目で、「まったくしない」と回答した生徒の割合が1.0%と昨年度の県平均と比べて8.6ポイントも下回った。そして、「先生はわかるまで教えてくれているか」の項目で、肯定回答率が昨年度から0.9ポイント増加し、91.0%となった。これはP L Tや自学ノートの取組が生徒たちの学習への意欲や向上心、充実感へとつながったと考えられる。

イ 家庭でのタイムマネジメント力の育成

県学調質問紙の「学校の授業以外で、週に何日くらい勉強しますか」の項目について、「ほぼ毎日」と「4～5日」の割合が95%と、昨年度から25.8ポイント増加した。「メディアチャレンジウィーク」や読書習慣づくりの取組などを通して、生徒達によりよい生活を送ろうとする意欲が高まり、それが学習習慣づくりにより影響を及ぼしていると考ええる。

③仮説3について

ア 誰一人取り残さない矢部スタイルの確立に向けた取組

校内アンケートの結果(資料39)、「矢部中学校の授業は分かりやすい」「矢部中学校の学習は楽しい」「分かった・できたという達成感がある」について、肯定的回答率の割合が約9割で、ほとんどの生徒が学習の楽しさを実感し、達成感を得ている。また、「自分の理解にあった課題に取り組む時間がある」の肯定的回答率も約9割で、個別最適化された学びを支える取組を進めることができたと考える。

さらに、県学調質問紙の結果を見ると、「家で授業の予習や復習をしている」(R4年79.0%・R3年56.6%)、「ノートを取り方を自分なりに工夫している」(R4年80.0%、R3年70.7%)、「授業で課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」(R4年83.0%、R3年68.8%)生徒の割合が増加し、学びに向かう意識が高まったといえる。他にも、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えていると思う」生徒が91.0%(R3年90.1%)と高い割合であり、生徒の実態に応じた取組を進めることができたと考える。

イ 安心して学べる学習環境づくり

県学調質問紙の結果から、「気持ちを分かろうとしてくれる先生がいる」(89.3%)、「気持ちを分かってくれる友達がいる」(94.6%)など、ほとんどの生徒が安心して学校生活を送っていることが分かる。また、「がんばったとき、友達からほめてもらうことがある」生徒の割合(91.6%)が高く、生徒間で励まし合う取組の成果があらわれている。他に、「ひとりぼっちになる不安を感じることはない」(89.3%)や「いじめのターゲットになる不安を感じることはない」(92.8%)など、友達関係の中で安心感をもって過ごしている生徒の割合が高い。

2 研究の課題と志向

本年度、「熊本の学び」授業実践7つのチェックリスト及びR-PDCAプランを活用して取組への意識を向上させることはできたが、個人が検証する時間を十分に取ることができなかった。今後は、定期テストやアンケート実施後に検証する時間を設け、適宜、Do(実行)の内容を修正し、次の定期テストやアンケートまでの期間に実施することを確認していきたい。

生徒の学ぶ姿勢については、能動的に学び続ける生徒が増加している。その一方で、学力や学習に対する意欲の個人差が大きく、学習が苦手な生徒の対応には工夫が必要である。この後も、誰一人取り残さない学びの保障のために各教科で学習リーダーの育成が鍵になると考える。

今回の取組の中で、家庭学習も含めた学習習慣づくりのためには、それを支える生活習慣の改善が重要であることも分かった。学校内で学習や啓発の取組を進めるとともに、今後も家庭と連携する取組を続けていきたい。



参考・引用文献

- 1 中学校学習指導要領及び中学校学習指導要領解説総則編 文部科学省
- 2 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申） 文部科学省
- 3 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程企画特別部会 論点整理 文部科学省
- 4 「授業の見方『主体的・対話的で深い学び』の授業改善」澤井陽介 東洋館出版社
- 5 「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて：校内研修シリーズ」田村学
NITS 独立行政法人教職員支援機構

おわりに

「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一、生き残るのは変化できる者である。」これは、『種の起源』の著者であるチャールズ・ダーウィンの言葉として、様々な場面で引用されるものである。

本年度、私たちは、「子供を育てる学校」から「子供が育つ学校」へ変革していくために研究を進めてきた。また、教師自身が学び続けるR-PDCAプランづくりも推進した。その成果として、子供たちも私たちも、様々な変化があったものと考えられる。私たちの手法と熱意で、子供たちが豊かに育ったか、確かな学力が身についたか、本論文で検証したことをさらに生かし、今後も教育実践を重ね、本校の教育目標の実現に向けて邁進していきたい。

最後に、本研究の推進にあたり、ご指導・ご助言をいただいた上益城教育事務所並びに山都町教育委員会に心から感謝とお礼を申し上げたい。

山都町立矢部中学校 研究同人

富士川晶三	西田圭	古閑謙治	藤本修一	後藤博美	寺田亜紀	齊藤史	宮部一輝
藤本亮祐	與儀聡子	池部麻依	仲川瑞樹	松川華奈子	尾鷹穂乃花	丹波翔馬	
福島賢亮	大瀧裕子	志賀尚子	岩戸紗弥加	山下史華	八田卓二	川上奈緒美	
椿貴美子	春木恵	平川亜紀子	寺崎佳宏	荒嶽美桜	平川美保	吉竹香枝子	